

アコースマティックな聴取と音に関する美的経験

—— スクルートンの音楽哲学に関する批判的考察

松崎 俊之 (石巻専修大学)

イギリスの哲学者ロジャー・スクルートンはその著『音楽美学』(1997)において、音の原因となる音源に注意を向けることなく音それ自体に意識を集中させる聴取様態である「アコースマティックな聴取(acousmatic hearing)」をもとに音楽に関する哲学的考察を展開するのであるが、本発表の目的は、アコースマティックな聴取というこの特異な聴取様態について、それをとくに音楽経験に限定することなく、音に関する美的経験一般との関連において考察することにある。

スクルートンによれば、アコースマティックな聴取様態はとくに音楽において問題となると言えるが、ここではアコースマティックな聴取と音楽との関係について論じるスクルートンの議論を、(1)アコースマティックな聴取のもとでの、その音源をも含む広義での音(sound)の楽音(tone)への変容、(2)アコースマティックな聴取のもとでの楽音の組織化、(3)楽音における音色の位置づけ、(4)楽音の組織化にあたってその形式的枠組みをなす空間という四つの主要な論点のもとに再構成することで、その基本骨子を明示することを試みる。

アコースマティックな聴取と音楽との関係をめぐるスクルートンの議論に対してはハミルトンが仮借ない批判をおこなっているのであるが、彼は、スクルートンの議論の要諦を「音(sound)を音楽として聞くことは、音を現実世界においてその原因となる音源から切り離し、音それ自体に注意を向けることによってはじめて可能となる」という「アコースマティックテーゼ」として捉え返したうえで、この「アコースマティックテーゼ」に対して(1)音色、(2)空間、(3)ヴィルトゥオシティ(名人藝)、(4)音楽の非聴覚的経験という四つの観点から批判を加える。

しかしながら、ハミルトンがその批判の矛先を向ける「アコースマティックテーゼ」はあくまでアコースマティックな聴取と音楽経験との関わりを問題とするにとどまるものであることから、アコースマティックな聴取が蔵する理論的可能性の全幅を測るには、この聴取様態を音楽経験との関係に限定することなく、より広く音に関する美的経験一般との関係において捉え返す必要がある。こうした問題視角のもとに、あらためて音に関する美的経験の基本的問題構制のうちにアコースマティックな聴取を明確に位置づけるならば、音に対してこの聴取様態が取られることが引き金となって、音に関する美的経験の発生メカニズムが起動することが明らかとなる。すなわち、聴覚主体がアコースマティックな聴取というある特異な聴取様態のもとに音を〈聴く〉ことによってはじめて、音を美的に感受するという、音を知覚するのとは異なった音に関する経験モードが開かれることになるのである。まさにその意味で、アコースマティックな聴取は音に関する美的経験の成立にとってその必須の前提要件をなすと言える。